



平安時代の本殿を復元
 工学博士の福山敏男氏と株大林組は、さまざまな資料をもとに、平安時代中期の出雲大社本殿を十六丈四八メートルと推定し、現代建築学の粋をもって詳細な設計図と復元図を作成しました。三二丈は難しいとしても、十六丈の巨大な神殿の存在を、現代科学はきびかに確かなものへと近づけたのです。
写真イラスト提供：株大林組

一、神話と出雲の大社 国譲りの代償

出雲大社の成り立ちと巨大な建物の様子は、奈良時代に朝廷が編纂した『古事記』『日本書紀』の『国譲り神話』の中で大きく取り上げられています。要約すると、『大国主命が治めてきた葦原中津国を、高天原の皇孫に国譲りする代償として、高天原は大国主命が鎮座するための最大・最高級の社を造営する』ということになります。

『古事記』『日本書紀』において、神社の創建の由来や建築の様子をここまで詳細に述べた例はほかになく、朝廷にとっても出雲大社の歴史と巨大性は、特筆すべきことがらであったのでしょう。

『出雲国風土記』の大社

一方、同じころ、地元出雲国で編まれた地誌『出雲国風土記』もまた、この社の成立を特筆しており、出雲大社は「杵築大社」の名で登場します。それによると、出雲大社の建っている「杵築」という地名は、「大穴持命の宮を造営しよう」と、多くの神々が参集して築かれた「こと」に由来するとしています。大穴持命とは大国主命の別名です。

以上、千年以上たわたる出雲大社の歴史をわずかに垣間見るだけでも、その背負ってきた歴史・伝統・文化の重みを感じることができたのではないのでしょうか。出雲大社は今日、神社という信仰の対象であることとはもちろん、島根県のみならず、日本が世界に誇る貴重な文化遺産と誇ってよいでしょう。

ミスデリアス・ツアー